

仕事に処する三つの秘訣

第0115号

2026.3月号

NPO法人福岡実践人

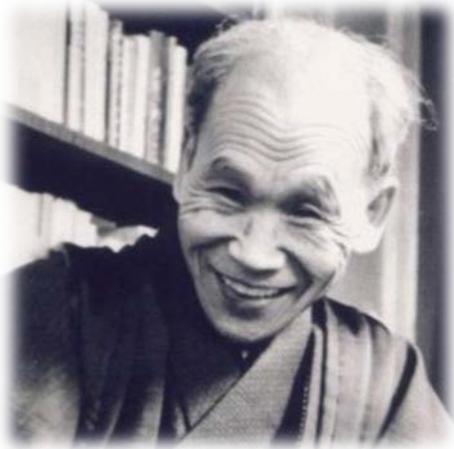
再

生

- (一) 思いきって「とにかく手をつける」即今着手のこと。
- (二) 一度着手した仕事は二等分線を越えるまでは一気呵成にやっつてのけること。

- (三) 仕上げはまず八〇点級のつもりで、絶対期限をおくらさないこと。

この良い意味の拙速主義が大事です。森信三先生一語千鈞より



一日は一生の縮図なり

再生の題字（森畑彦様提供）は、森信三先生の直筆です。

日本の父へ

グスタフ・フォス 著

1 父ありき—私は父からこう学んだ

威厳には厳しさが伴う

昭和五、六年にドイツでは、ナチスと共産党の青年団が激しく争う時期があった。秘密集会、デモ行進、すさまじい激論、そして殴り合いなど、日常茶飯事だった。私たちカトリック青年団はその間にはさまれて、左からも右からも叩かれ、惨憺たる状態だった。ドイツはいつたいどうなのか——私たちは、自分たちが今立ち上がないのは卑怯なことだと思つて、必死になつて議論を続ける毎日であった。

ある朝、父が勤めにでかける直前になつて、私は思い切つて言った。

「ちよつとお話したいことがあるのですが」

「なんだ、急に」

父は上衣に腕を通しながら、こちらを向いた。

「この週末に集まりがあるのですが、参加申し込みをしないでいいでしょうか」

「なんの集まりだ？」

「まあ、セミナーみたいなものです、ファシズムについての」

それを聞いて、父は私を見つめて、

「反対運動でも起こすつもりなのか」

「そこまでは考えていないんですが、しかし、何とかしなければならぬいでしょ？」

「そうか！そういう話か。でもおまえはあまりにもずるいぞ。ちよつどでかけるところなんだからな」

私は話が長びいては事が面倒になると思つたので、急いで訴えた。

「すみません。でも、申し込みは今日までなんです。申し込み料は僕の小遣いでなんとか間に合います」

父はにやりとして、私の頭を軽くおさえながら、

「金持ちだなあ、おまえは。しかし、お父さんはすこし考えたいんだ」

「先生からも、ぜひ来てくれないかといわれたんですが」

「先生に？」と、父はすこし言いよどんでから、肩をすくめてつぶけた。

実践人福岡仁風読書会 第一一六回 2月7日

場所：仁風庵

(実践人の家の会員であればどなたでも参加できます)

(参加費無料)

詳細は、世話人へお問い合わせください。

「先生の中にもいろいろの人がいるんだよ。思想的に染まっている人だっているんだ」

「でも、あの先生は大丈夫です。全然心配がありません。私たちの味方ですよ」

そして、父は再び私の頭に手をのせて、

「それにしても、どうして、おまえは今まで何も言わなかったのか。おまえ自身迷っているからだろう？急にそんなことを言い出したって駄目だ。今晚まで待ちなさい」

玄関へ歩き出した父に追いつがって、私は必死で頼んだ。

「友だちも行くんです。四、五人参加するんです」

「友だちが行くからおまえも行くというわけはないだろう。そんなことを認める前に、お父さんはおまえとゆっくり話がしたい。今晚でもどうだ、友だちも誘つてこい」

私のがっかりしてしまった。学校で、友だちに、

「君のおやじは頑固だな」

と言われて、憂鬱になった。友だちは、

「そうか。よし、僕らも応援しよう。今晚大いに議論して、君のおやじを説得しよう」と、励ましてくれた。

しかし、私たちは父を説得できなかった。父は、まず次のように口火を切った。

「いいかね。倅が何をしているのか、何をしたいのか——それはお父さんと関係のないことではないよ。倅のやりたいことを認めるか認めないか、それを決めるのが父親なんだ。父親の務めなんだよ」

それから、父はゆっくりみんなを見渡してから、

「まあ、こんな堅苦しい権利論は抜きにしてもだよ、父親には、君たちに対する責任がある。子供がやっていることに関してね。子供が親の脛をかじっている間、せめて成年に達する日までは、親の道義的責任は免れることができない。このことを忘れないでほしい。君たちがやろうとしていることはよくない、とは言わないが。でも、としはとした。自分たちがやることに對して、君たちはちゃんと責任がとれるかね」

「しかし、ナチスのやっていることはけしからんですよ。共産党はなおひどい。われわれ若ものが何もせず、彼らのイデオロギーや革命思想さえも勉強しないということは、あまりにも無責任ではないですか」

ここから議論が始まった。そして、母が心配するほど、私たちは激しく主張した。私たちはなんとかして父を説得したいと思つて、よく準備していたのである。父は私たちの考えを最後まで静かに聞いてくれた。私たちがこれで反論の余地はあるまいと、いくらか誇らしげな面持で喋り終わると、父は、なるほどといった顔つきで微笑した。父はソファに腰をおろし、脚を組んで私たちの話を聞いていたのだが、私たちがさつとという具合に、父の話を待ち構える気配を知つて、まず、冷たくなりかけているお茶を飲むよう勧めた。それから、父は脚をほどこき、からだを真直ぐに立てて反撃を始めた。

父は私たちの議論のポイントのはずれを巧みに指摘し、思いがけない質問を浴びせて私たちをハッとさせ、さらに私たちが全く考えもしていなかった問題にまで話を発展させて、結局、私たちにももの言えなくさせてしまったのである。自信たっぷりな十七歳の高校生を相手に、全然学歴のない——小学校しか出ていない父は、真正面から取組んで負けた。歴史、経済、政治などの勉強をしている私たちは、具体的な細かい知識の点では、たしかに父より物知りだった。それにもかかわらず、父は遠慮なく、しかも真剣になつて私たちを攻撃したのである。しかも、話は一方的ではなく、私たちが言いたいことは全部言わせてくれたのである。友だちも、父は「偏狭なわからず屋」ではないということがよく分つた。だから、私たちは、父が出した結論に心から納得することができた。

父は母にお茶のおかわりを命じてから、静かに言った。

「君たちが憤慨するのも無理のないことだ。でも、君たちは自分が何をすることができるか、もつと实际的に考えなさい。いま騒ぎを起こすのは、若いエネルギーの浪費になるのではないか。感情に走つてはいけ
ないな」

それから父は大きくうなずいて、

「君たちの持つている不満や怒りは大切なものだよ。それが消えないように大事にすることだ。大人になつたときにも、今の気持を失わないでいてほしいものだ」

私たちは父に、負けた。ことをべつにくやしく感じなかつた。かえつて、父の洞察力、特にその信念に感銘をうけた。人生のひとりの先輩として、父の体験は貴重なものだと思つて感づいたのである。友だちは、もう、おやじを頑固だとは言わなかつた。それどころか、父とさよならの握手をしながら、口々に、「いつかまた、是非、議論しましょう」と言つて帰つて行つた。

最近、家庭教育の一つの欠陥として、いわゆる父親不在の家庭の問題が大きくクローズアップされている。世の父親は、勤め、出張、残業、あるいはつきあいなどの理由で、たしかに家庭にいる時間がすくなくさる。理想的ではないが、現実の日本の社会においてやむを得ない事情であるかも知れない。私としては、この、外での用事による不在は、それほど問題ではないと思つて、むしろ、父親の家庭における、精神的不在が悪影響を及ぼしているのは否定できない事実である。

レクリエーションやくつろぎを主に外で求めること、そして家にいるときには（疲れているからとかいって）、家庭にとけこまないで傍観者の態度をとること——このような、父親の役割についての認識不足や無関心または無感動こそ、父親の、精神的不在の原因なのである。非両親的だと言わざるを得ない。

第二次世界大戦後の日本において、旧来の家庭の在り方に対して厳しい批判の目が向けられて、日本の民主化は、家の改善から始まるべきだという動きが強く現れた。その結果として、家庭制度も家長制度も廃止されたのである。その制度がなくなつたこと自体は、必ずしも悲しむべきことではないが、それによつて家庭が根底までゆり動かされたことは、戦後の日本のいちばん大きな禍である。家庭の根幹は、言うまでもなく父親である。しかし、家庭における父親の座はフラフラして、はなはだしくゆらいできた。家庭の統治者であるべき父親が、家庭会議の単なる司会役または高等小使いみたいな哀れな存在になつてしまつたことはよく見受けられる。

もちろん、家父長制度の廃止以外に、父親の威厳を動揺させてしまった原因がいろいろある。基本的人権や男女同権や児童憲章の布告、若い世代の、封建主義や権力に対しての反発、全世界の注目を引いているウーマン・リブやウーマン・パワーの出現、はては悪名の高い教育ママ人種の増加など、さまざまな理由が挙げられるだろう。それらの善し悪しはともかくとして、父親の役割が驚くほど弱まってしまった。大ぜいの父親は、不安を感じながら、どうすればよいかお手上げの状態だ。頭をかきながら、困った、困ったといっているだけである。結果として、まるで新しいスタイルの父親が生まれてきた。すなわち、世の中の多くの父親を指して、ただよきパパにすぎないとか、ただの給料袋の運搬屋であるとか、皮肉をまじえていう人が遺憾ながらすくなくないのである。

このような父親の新しいスタイルは父親というものの格下げであり、父親の威厳を危険にさらすことにほかならない。それこそ、家庭生活や家庭教育を乱す元凶なのである。なぜなら、父親の威厳というものは、父親としての役割の前提であって、その威厳喪失は家庭の中に甘えを生み、妻や子供たちを不幸にしてしまうからである。これは、現代の家庭にとつてだけでなく、現代の社会にとつても大きな禍である。

私の父は一家を支えるよき稼ぎ手であり、冗談や遊びや悪戯のよき仲間であった。それと同時にまた、行儀やしつけを重んじ、断固として悪を懲らしめ、迷わずに善を貫くおやじであった。威厳をもって家庭に臨み、全力を家庭にうち込んだ父だった。そういうおやじに、もちろん私は恐れを感じる時もあった。威厳には、当然、厳しさが伴うからである。しかし、いま考えてみると、この威厳によってこそ、私の心の中におやじは頼りになるという信頼感が生まれたのである。そして、それがいつでも私を守ってくれた。私は父の強い手に導かれて、不安や迷いの錯綜する青春の時代を幸せにすごすことができたのである。

グスタフ・フォス【威厳には厳しさが伴う】を読んで、

まず強く感じるのは、「この父親は怖い人だった」のではなく、「逃げない人だった」ということだ。今の感覚で言えば、正直めんどくさい父親だと思う人もいるかもしれない。忙しい朝に話を切り出されても即答しないし、「友だちが行くから」なんて理由は一蹴するし、夜には友だちまで呼んでがっつり議論する。楽ではない。でも、この「楽をしなさい」が、まさに父としての姿勢そのものだったんだと思う。今の日本の父親はどうだろう。優しい人は多い。子どもの話もよく聞くと、昔みたいに一方的に怒鳴りつける父親は減った。それ自体は悪いこと

じゃない。

でもその一方で、「決めない父」「踏み込まない父」「最終責任を引き受けない父」が増えたようにも見える。何か問題が起きると、「本人の意思だから」「もう大きいから」と一歩引いてしまう。引くことが尊重だと思いついでいる。でも、子どもからすると、それはときに「見放された感じ」になる。

この文章の父親は違う。息子が何をしようとしているのかを、「関係ない」とは言わない。むしろ真逆で、「それを決めるのが父親の務めだ」とはっきり言う。今の感覚だと、ずいぶん強い言い方に聞こえるかもしれない。でも、ここにあるのは支配欲じゃない。「もし何かあったら、自分が引き受ける」という覚悟だ。だからこそ、軽々しく賛成もしないし、感情的にもならない。時間をかけて考え、議論し、最後は自分の言葉で結論を出す。

議論の場面も印象的だ。父は子どもたちの話を最後まで聞く。遮らないし、馬鹿にもしない。その上で、論点のズレを指摘し、想定外の問いを投げる。しかも学歴は小学校卒業。それでも負けない。ここにあるのは知識量の勝負じゃなくて、人生を引き受けてきた人間の視点だと思う。机の上の正しさだけじゃなく、「それを今やる意味は何か」「君たちは責任を取れるのか」という現実の重さを突きつける。その厳しさが、子どもたちを黙らせた。

この父は、若者の怒りや理想を否定しない。「その気持ちは大切だ」「消さずに持っていなさい」と言う。でも同時に、「感情に走るな」「エネルギーの使いどころを考えろ」と釘も刺す。ここがすごく大事なところだと思う。肯定だけでも駄目だし、否定だけでも駄目。その間に立って、方向を示す。それが父の役割なんだと、この文章は言っている気がする。

戦後の日本では、父親の威厳という言葉自体が、どこか危険なもの扱いされてきた。「威厳」封建的」「厳しさ」抑圧」というイメージが強かったからだ。その結果、父親は家庭の中でどんどん立場を失い、「いいパパ」か「給料を運ぶ人」になっていった。家においても疲れているからと会話に入らず、面倒な判断は避け波風を立てないことを優先する。本文が言う「精神的な不在」とは、まさにこのことだろう。

でも、この文章が語る威厳は、決して偉そうにすることじゃない。怒鳴ることでも、支配することでもない。家庭の中で、「最後に判断し、責任を引き受ける人がいる」という状態そのものが威厳なんだと思う。そしてその威厳があるからこそ、子どもは安心できる。怖いと感じることはあっても、「この人は自分を守ってくれる」という信頼が、心の奥に残る。

筆者が最後に語るように、父は冗談も言うし、遊び相手にもなる。でも同時に、善悪の線をはっきり引き、迷わず叱る。その厳しさがあつたからこそ、父の存在は頼りになった。威厳には厳しさが伴う。でもその厳しさは、子どもを押さえつけるためのものじゃない。不安だらけの世界を生きていくときの、背骨をつくるためのものだ。

今の日本の父親に必要なのは、昔に戻ることじゃない。家父長制を復活させることでもない。ただ、「嫌われない父」でいることより、「信頼される父」であるところから逃げない。子どもと向き合い、考え、決める。その姿勢そのものが、もう一度、父の威厳を家庭に取り戻すんじゃないだろうか。袈裟右衛門 拝

第三章 掃除が学校を変える



美德が悪徳になる世の中

今の世の中、経済が発展し、「コストパフォーマンス」という言葉がよく聞かれるようになりました。「コストパフォーマンス」とは、かかるお金に対して、どれだけのものが得られるかということ、日本語で「費用対効果」のことです。

コストパフォーマンスは高いほどいいとされています。つまり、「得られれば得られるほどいい」という意味ですが、私はこの言葉が好きではありません。自分が得をすることばかりに目が向くということは、もの奪い合いにつながります。日本の企業は人を幸せにするのではなく、人を不幸せにしながら膨張しています。大企業になればなるほど、その傾向は強く出ます。「自分さえよければいい」という気分が社会に蔓延し、若い人にも確実にその悪い傾向が伝わっています。電車の乗り降りの姿を見てもそうでしょう。電車が止まって降りる人がすんでから乗る、混んでいる電車から降りるときはまわりの人に声をかけて、ゆっくり降りる。そういうごく当たり前の気配りができなくなってきました。

「座りたいから」「急いでいるかも」と自分のことしか考えていないからです。「人に迷惑をかける」ということに鈍感になってきている現状は、嘆かわしいことです。

今の若い人たちに伝えたいことは、「みんなが得することばかりしたら、世の中はよくならないんだ」ということです。

私は、昭和三十年、二十二歳のときに『次郎物語』で知られる作家・下村湖人の『青年の思索のために』を、当時の百円で購入し、くりかえしこの書を読み続けてきました。その中に出てくる「美德」の定義が私の心をとらえたのです。

下村湖人によれば、「日本人は美德をもっているが、その美德はときに悪徳に変わる。忍耐は美德だが、それが過ぎれば怨恨の源ともなる。同じように、謙譲し過ぎれば卑屈にもつながり、調和を求め過ぎれば妥協に陥り、勇気は粗暴になり得る」と言います。

では、美德が悪徳とならないためにはどうしたらいいか。そこには「愛」が必要で、愛とは自分と同じように相手を大切にすること、という事です。相手を思いやり、どうしたらこの人に幸せになってもらえるかを懸命に考

えるということ、です。

他者に対する愛がない、このことが日本を悪くしていると思います。だからこそ、美德がなくなり、悪徳の人が増えているのではないのでしょうか。

鍵山秀三郎先生の想い

鍵山秀三郎先生がこの話を通して最も伝えたかったのは、社会が悪くなる原因は制度や時代の変化ではなく、「人の心の在り方」にある、ということではないだろうか。

経済の発展や効率化そのものを否定しているのではなく、それを最優先にした結果、人を思いやる心が後回しにされてしまった現状を、強く憂いているように感じられる。

先生は、「美德」という言葉を用いながら、日本人が本来持っていた長所に目を向けている。しかし同時に、それらの美德が無条件に正しいわけではないことを指摘する。忍耐も調和も、相手への愛を失った瞬間、人を苦しめ、社会を歪める力へと変わってしまう。

ここには、「よい行いをしているつもりでも、心が伴っていないければ意味がない」という、先生の厳しくも誠実な人間観が表れている。

また、電車の乗り降りという身近な例を挙げている点から、先生の関心は常に「日常」に向けられていることがわかる。社会の崩れは、特別な事件から始まるのではなく、挨拶をしないこと、譲らないこと、声をかけないことといった、小さな無関心の積み重ねから生まれる。だからこそ、社会を立て直す第一歩も、日々のささやかな行動の中に

あるのだと訴えているように思う。

先生が最後に行き着く答えが「愛」であることは、決して感情論ではない。愛とは、自分と他者を同じ重さで考える姿勢であり、相手の幸せを自分の問題として引き受ける覚悟である。

この愛がなければ、美德は形骸化し、効率や得だけを追い求める社会に流されてしまう。

鍵山秀三郎先生の想いは、「立派な人間になれ」という理想論ではなく、「まず、目の前の人を大切にせよ」という、極めて現実的なメッセージである。

自分さえよければいいという生き方を問い直し、他者と共に生きる覚悟を持てるかどうか。

その問いを、先生は静かに、しかし強く、後に続く私たち一人ひとりに投げかけているのだと感じた。

袈裟右衛門 拝

日本一きれいな博多駅・福岡の街に！

第 387 回

博多駅 早朝清掃

毎月 **8** 日 午前6時15分～

【第一回】平成5年12月8日開催

福岡実践人・JR九州博多駅
精華女子高等学校・福岡掃除に学ぶ会

 ハウスメイト



第387回 博多駅早朝清掃 令和8年

2月8日(日曜日)

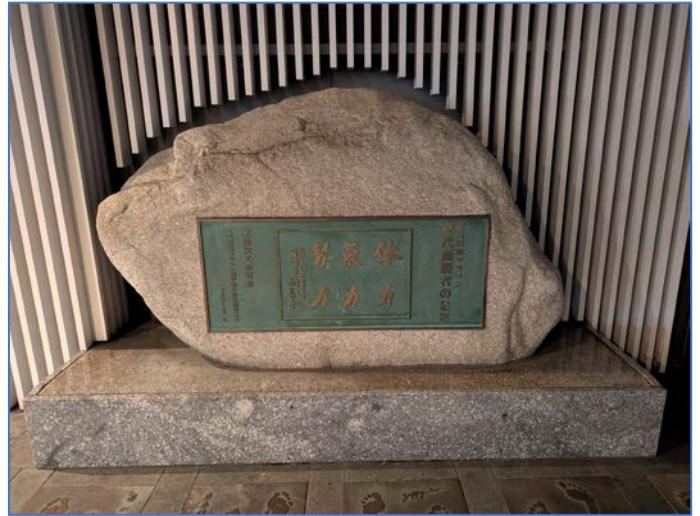
27名参加



博多駅早朝清掃 第387回 本日も早朝より多くの皆さまにお集まりいただき、誠にありがとうございました。午前5時20分、博多駅に到着すると、池田さん・海野さん両代表がすでに準備を整えて待ってくださっていました。夜半からの冷え込みで、駅に向かう道すがら雪が吹雪き、今年一番の寒さを感じる朝となりました。西の空に輝く半月が雪を照らし、街灯に反射する雪が幻想的に輝いています。この極寒の中、布団から出て参加された皆さまの行動自体が、帆足先生がおっしゃった「早朝清掃は自己鍛錬の道場」にふさわしいものであり、まずその志を賞賛いたします。強風で横断幕は飛ばされましたが、それでも博多駅を日本一の駅にしようという思いを胸に、同志・道友が集まり、手際よく清掃に取り組みました。駅構内や周辺のゴミを拾い、手すりやベンチも丁寧に整えました。清掃を終えて改めて感じるのは、掃除は単に場所をきれいにする行為ではなく、自らの心を磨く時間であるということです。天から帆足先生も、この有志の姿をご覧になっていることでしょう。鍵山秀三郎先生の言葉を引用させていただきます。

「掃除は、ただ汚れを落とすことではなく、自らの心を磨くことである。」本日も寒さに負けず、皆さまと共に清掃に取り組みめたことを大変うれしく思います。これからも博多駅を日本一美しい駅にするため、心を込めて活動を続けてまいります。

袈裟右衛門 拝



2026.02.15 AM5:00～

於：太宰府観世音寺トイレ磨き



毎月第三日曜日は、太宰府での「三社巡りお掃除」です。

朝3時30分、観世音寺駐車場を出発し、太宰府天満宮までの往復約3.8kmを、ごみを拾いながら歩きます。まだ静まり返った早朝の道を、一つひとつ丁寧に拾いながら進む約1時間。清掃を兼ねた参拝は、終わるころには身も心もすっと整い、清々しい気持ちに包まれます。

5時から観世音寺駐車場のトイレ清掃。太宰府市文化財課のご理解をいただき、場所をお借りしての“心磨き”の時間です。

「心は取り出して磨くことはできません。まずは目の前の汚れを磨くことから始め

ましょう」——鍵山秀三郎先生の

この言葉を胸に、毎月変わらず続けています。目の前の汚れに真心で向き合うことが、自分自身の心を整えることにつながるのだと、実感しています。

三カ所目は、戒壇院での作務です。3月15日の涅槃会を前に準備が整う中、小雨の降る山門で石畳を磨かせていただきました。ご住職もともに作務に加わってくださり、「山茶花の花は掃かずに残しておきましょう」とのお言葉。散ってなお人の目を楽しませる花を大切にされる、そのお心に触れ、あらためて掃除とは単に“きれいにすること”ではなく、思いやりを形にする行いなのだと感じました。お勤めのないときには住職自ら率先して作務に立たれ、その背中が場の空気を整えてくださいます。

鍵山先生はまた、「掃除は人を育て、人生を変える力がある。」とも教えていただきました。

特別なことをしているわけではありません。毎月同じ時間に集い、目の前の場所を丁寧に磨く。その積み重ねが人を育て、場を育て、ご縁を育てていくのだと思います。これからも一步一步、掃除を通して心を磨いてまいります。 けさえもん 拝

2026.02.15 AM.6:15～

於：太宰府戒壇院作務





雪の花巻に学ぶー 第六回花巻街頭清掃に参加して

令和八年二月一日。

私は福岡・博多の地から、岩手県花巻市で開催された「第六回 花巻街頭清掃」に参加させていただきました。前夜から降り続いた雪は約十センチ。夜中も融雪車が稼働するほどの本格的な雪景色のなかでの開催です。集合は朝五時五十分、花巻中央広場。

大阪、香川、福岡、宮城、そして岩手県内から、四歳児を含む小学生まで、総勢二十八名が集いました。

「雪の中で、どうやってゴミ拾いをするのだろうか。」

そんな期待と少しの不安を胸に、私は北国の朝に立っていました。

雪国ならではの「街を守る掃除」

実際に街へ出てみると、そこには想像していた「ゴミ拾い」とは少し違う世界が広がっていました。雪に埋もれたゴミを探し出すこと。バス停の椅子に積もった雪をかくこと。消火栓を覆い尽くす雪を取り除くこと。日頃お世話になっているポストの雪を払うこと。それは単なる清掃活動ではありませんでした。

「街を守る掃除」でした。特に印象的だったのは、消火栓の雪かきです。もしもの火災時、雪で埋もれていては命に関わる。そのことを、なんと四歳のお子さんが教えてくれたのです。年齢や経験を超えて、互いに学び合う。これこそが街頭清掃の大きな魅力であり、掃除道の真髄なのだと感じました。

鍵山秀三郎先生の言葉に照らして

鍵山秀三郎先生は、こう述べておられます。「掃除は、心を磨く行である。」

また、「人の嫌がることを率先して行うところに、人間の値打ちが生まれる。」

雪の朝五時台。寒さは厳しく、手足はかじかみます。決して楽な環境ではありません。

しかし、その中で誰かのために雪をかき、街の安全を守る行為は、まさに「人の嫌がることを率先して行う」

実践そのものでした。掃除とは、目に見えるゴミを取ることに以上、

自分の弱さ、怠け心、自己中心性を取り除く営みなのだと、雪の花巻であらためて教えられました。

極寒の地と博多の地ー 掃除の違い

私は博多で日常的に街頭清掃を行っています。

博多の掃除は、主にタバコの吸い殻、空き缶、ペットボトル、落ち葉などを拾う活動です。

季節によっては暑さとの闘いになります。特に夏場は、汗が止まらず、体力も奪われます。

一方、花巻の冬は寒さとの闘いです。しかし、寒さだけではなく、雪そのものが「相手」になります。

ゴミは雪の下に隠れ、見えません。除雪をしなければ、本来の清掃にすら辿り着けない。

ここに大きな違いがあります。博多では「目に見えるものを取り除く」ことが中心。

花巻では「まず環境を整えなければ、取り組みが始まらない」。

つまり、その土地の気候・風土に応じて、掃除の在り方も変わります。

その土地に合った取り組み方

掃除道は、単なる技術ではありません。精神の在り方です。だからこそ、暑い土地では、暑さに耐える忍耐力を磨く。寒い土地では、寒さの中で体を動かす勇気を養う。雪国では、ゴミ拾い以前に「安全を守る整備」を優先する。その土地に合った取り組みをすることが大切です。鍵山先生は、「環境を整えることは、自分の心を整えることにつながる」と説かれています。花巻での雪かきは、まさに環境整備でした。

そしてそれは、参加者一人ひとりの心を整える時間でもありました。

次の頁へ続く

掃除に学ぶ心構え

今回の花巻での体験を通して、三つの心構えを学びました。

一、まず動くこと

寒い、暗い、眠い。言い訳はいくらでも出てきます。しかし、まず一步踏み出す。これが掃除道の出発点です。

二、目立たないところを大切にすること

消火栓やポストの雪かきは、誰も気づかないかもしれません。

しかし、誰かの命や生活を守っています。目立たないところにこそ、本当の価値があります。

三、学び続ける姿勢

四歳児から学ぶ。土地から学ぶ。気候から学ぶ。「自分はまだまだ学ぶ立場である」と謙虚でいること。

これもまた、掃除道の精神です。

花巻と博多をつなぐもの

極寒の花巻と、温暖な博多。環境は違います。けれども、根底に流れる精神は同じです。

誰かのために動くこと。人の嫌がることを率先して行うこと。小さなことを徹底すること。

鍵山秀三郎先生は、

「凡事徹底」という言葉を大切にされました。特別なことではなく、当たり前のことを、当たり前以上に行う。

雪をかくこと。吸い殻を拾うこと。それは小さな行為です。

しかし、その積み重ねが地域を変え、やがて自分自身を変えていく。

おわりに

花巻の白い雪景色の中で、私は掃除の本質をあらためて見つめ直しました。

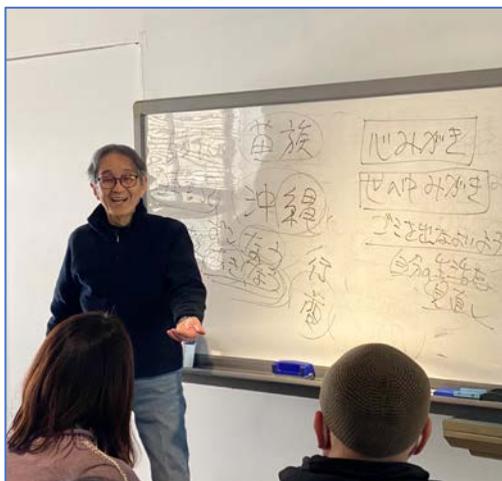
掃除とは、単なる美化活動ではありません。地域への感謝を形にする行為であり、自分自身を磨く行であり、

人と人をつなぐ道です。極寒の地での清掃体験は、博多の地でのこれからの取り組みに、新たな視点と覚悟

を与えてくれました。どの土地であっても、その土地に合ったやり方で、謙虚に、黙々と、淡々と続ける。

その積み重ねこそが、「掃除に学ぶ精神」なのだ、と、深く心に刻まれた一日でした。

2026.02.01 花巻街頭清掃&山本先生お掃除講座



第二部 山本健治先生「お掃除講座」

第二部は、山本健治先生による「お掃除講和」。先生のお話は、単なる掃除の体験談ではなく、日本人の精神文化に根差した“掃除の本質”を紐解くものでした。縄文・弥生時代の住居跡に見られる環境整備の痕跡。

『古事記』『日本書紀』に記された禊や祓の思想。古来、日本人にとって掃除とは、単なる美化活動ではなく「清め」であり、心を整える行為であったことを、歴史を通して示してくださいました。

特に印象深かったのは、「『を』と『に』の違い」のお話です。

「掃除をする」は作業。

「掃除に学ぶ」は修養。

同じ行為でも、向き合う姿勢によって、その価値は大きく変わる。

掃除から何を受け取るのか——そこに人間の成長の鍵があると、先生は静かに説かれました。

また、毎日続けることの尊さについても触れられました。

特別な一日よりも、平凡な一日の積み重ね。

続けることでしか見えない景色がある。

その言葉には、長年実践を重ねてこられた方にしか持ち得ない重みと説得力がありました。

世代を問わず参加者の心に深く届いたご講話。

掃除とは何かを改めて問い直し、自らの姿勢を省みる、静かで力強い時間となりました。

袈裟右衛門 拝

『地獄の経典』を読んで

山本健治著『地獄の経典』は、一般に想起されがちな死後世界としての地獄像を明確に否定し、人間の「生のあり方」そのものを根底から問い直す思想書である。本書を通して一貫して示されるのは、地獄とは死後に裁かれて墮ちる場所ではなく、「人が苦しみに囚われたまま生きている状態」そのものだという認識である。著者は、地獄を超自然的な空間としてではなく、きわめて現実的で、誰もが日常の中で知らぬ間に踏み込んでしまう心の状態として描き出している。

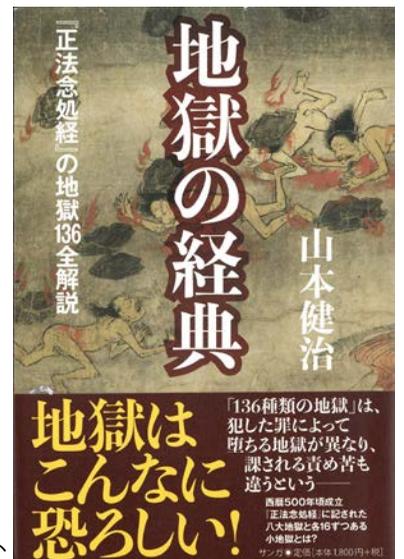
作中では、欲望・執着・怒り・妬みといった感情が、人間を内側から縛り、視野を狭め、苦しみを際限なく再生産していく様子が繰り返し語られる。人は他人と自分を比べ、「なぜ自分だけが報われないのか」「なぜ思い通りにならないのか」と問い続ける。その問いが解消されぬまま心に居座るとき、著者はそこをすでに「地獄」と呼ぶ。つまり地獄とは、特別な場所ではなく、せず、そこから抜け出せない心の停滞状態」なのである。

この視点が鋭いのは、地獄を他者や社会、運命のせいにする逃げ道を断っている点にある。本書では、苦しみは外部から一方的に与えられる罰ではなく、多くの場合、人が自らの心の構えによって生み出しているものと示される。著者は、人間が「正しい」「間違っている」という判断に強くしがみつくと、かえって対立や自己否定を深めていく様子を描き、善悪を単純に二分する思考そのものが、新たな地獄を生む原因になりうることを示唆している。とりわけ印象的なのは、「自分は正しい」という確信が、知らぬ間に他者を傷つけ、同時に自分自身をも追い詰めていくという指摘である。著者は、人が善意や正義を掲げて行動しているときほど、その行為が無自覚な暴力へと転じる危険性を孕んでいると語る。ここで描かれる地獄は、悪意によって作られるものではない。むしろ、「正しくあろう」とする必死さの中で柔軟さや他者への想像力を失った結果として生じる、静かで逃げ場のない苦しみなのである。さらに本書では、「苦しみから逃れようとする態度」そのものが、かえって地獄を長引かせるという逆説が繰り返し示される。人は苦しい現実と直面すると、それを否定したり、見ないふりをしたり、原因を外部に押しついたりする。しかし著者は、そのような態度こそが苦しみを固定化し、心を閉ざしてしまうと指摘する。苦しみを排除しようとするほど、苦しみはより強固なものとなり、心の奥に居座り続けるのである。その対極として語られるのが、「受け入れること」である。ただし、ここで言う受容は、諦めや思考停止を意味しない。著者が示す受容とは、自分の弱さや醜さ、矛盾を含めた人間の現実を、評価や判断を急がずに見つめる姿勢である。苦しみを敵として排除するのではなく、「いまここにあるもの」として引き受けるとき、初めて地獄はその力を失い始める。この考え方は厳しくもあり、同時にきわめて現実的である。

『地獄の経典』は、恐怖によって人を戒める書ではない。むしろ、自分自身の心の在り方に静かに目を向けさせることで、「自分はいま、地獄を生きてはいないか」と問いかけてくる書である。地獄とは何かを考えることは、そのまま「自分はどのように生きているのか」「どのような心で世界を見ているのか」を問い直すことにつながっている。重く、時に目を背けたくなる内容でありながら、本書が読後に残すのは絶望ではない。人間の弱さや未熟さを正面から見据えたうえで、それでもなお生き方を選び直す余地があることを示している点に、本書の思想的価値があると感じられた。地獄は避けるべき異界ではなく、気づかぬうちに足を踏み入れてしまう心の状態であり、同時に、気づいた瞬間から抜け出す可能性を内包した場所なのだと、本書は静かに教えてくれる。

加えて、本書の中で愚生がとりわけ注目したのは、二七四頁において克明に描かれている、徳川家康が東海道を五十三次と定めた理由についての考察である。この一節は一見すると歴史的挿話のようでありながら、人の移動、欲望、不安、秩序をどのように制御し、心を安定させようとしたのかという問題を、「地獄」という主題と地続きのものとして浮かび上がらせている。為政者が人間の心の動きをいかに見据え、それを制度として形にしたのかという視点は、修行僧の一人として自己の内面を省みるうえでも、きわめて示唆に富む着眼点であった。個人の心に生じる地獄と、社会の構造の中に巧妙に組み込まれた地獄とが、決して無関係ではないことを、この記述は静かに、しかし確かに物語っている。

2026.2.7 けさえもん 拝





再生三月号

令和八年三月八日発行 (毎月一回八日発行)

創刊 平成二十八年九月一日

発行人 富吉 袈裟右衛門

	3月							4月					5月								
日		8	21	15	15	28	28	29		8	18	19	19	25		8	16	17	17	30	
曜		日	土	日	日	土	土	日		水	土	日	日	土		金	土	日	日	土	
行事活動名		長目の浜海岸清掃 第38回	博多駅早朝清掃 第388回	冷泉公園トイレ磨き	太宰府観世音寺 トイレ磨き	戒壇院早朝作務 第33回	住吉神社便教会	楽農人農友を訪ねて	楽農人農友を訪ねて	長目の浜海岸清掃 第39回	博多駅早朝清掃 第389回	冷泉公園トイレ磨き	太宰府観世音寺トイレ磨き	戒壇院早朝作務 第34回	住吉神社便教会	長目の浜海岸清掃 第40回	博多駅早朝清掃 第390回	冷泉公園トイレ磨き	太宰府観世音寺トイレ磨き	戒壇院早朝作務 第35回	住吉神社便教会
場所		鹿児島県薩摩川内市	博多駅博多口	博多区冷泉公園内	観世音寺駐車場	太宰府市戒壇院境内	博多区住吉神社内	埼玉県深谷市		鹿児島県薩摩川内市	博多駅博多口	博多区冷泉公園内	観世音寺駐車場	太宰府市戒壇院境内	博多区住吉神社内	鹿児島県薩摩川内市	博多駅博多口	博多区冷泉公園内	観世音寺駐車場	太宰府市戒壇院境内	博多区住吉神社内
開始時刻		6時30分	6時15分	6時15分	5時00分	6時30分	6時15分			6時30分	6時15分	6時15分	5時00分	6時30分	6時15分	6時30分	6時15分	6時15分	5時00分	6時30分	6時15分
運営団体		とんぼろ海掃隊	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	太宰府作務に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	NPO法人楽農人	NPO法人楽農人		とんぼろ海掃隊	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	太宰府作務に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	とんぼろ海掃隊	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	太宰府作務に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会



根っ子の
友は
ありがたき
哉

上記行事予定表は、福岡掃除に学ぶ会全体の行事を掲載させていただいています。その他、活動しているお掃除実践もごさいますので、事務局にお問い合わせください。

発行人(編集人)富吉 袈裟右衛門

◇NPO法人福岡実践人 福岡掃除に学ぶ会

Lineグループ運営:福岡清爽クラブ

◇福岡仁風読書会

◇NPO法人楽農人 とんぼろ掃除に学ぶ会

〈合同事務局〉〒811-2247

福岡県糟屋郡志免町向ヶ丘2丁目4番3号 <仁風庵>

TEL 092-931-8155 FAX 092-931-8120

E-mail fukusoukai@souji.link (掃除)

こしき仁風庵:鹿児島県薩摩川内市里町里90番地



「再生」に掲載している写真は、富吉が撮影・管理しています。必要な方は事務局までご連絡ください。